川のない函館に日本２番目の水道敷設（その２）

中尾 仁彦　箱館歴史散歩の会主宰、第1回 函館検定 上級試験合格、ＮＨＫラジオ「どどんと道南ラジオ」に月１回レギュラー出演中。

前回に引き続き、「川のない函館に日本２番目の水道敷設」を掲載いたします。

元町配水場内（現・管理棟）明治 22 年建築

待望の水道敷設開始

明治 20 年の第 4 回目起業案で、ようやく函館区の公債発行が許可されます。早速道庁は横浜水道を設計監督した英国人ヘンリー・スペンサー・パーマに調査を依頼。給水人口 6 万人、総工費 23 万 5 千円の内、国庫補助金 7 万 5 千円、函館区共有財産より 5 万円、残り 11 万円を函館住民が区の公債を購入する計画を立てます。設計は当時留学経験者を重用する風潮で、鉄道工事で実績がありアメリカで学位を持つ平井晴次郎（後に鉄道庁総裁）、現場指揮監督は工学士・千種基（ちぐさもとい）が当たり、明治 21 年 10 月着工開始。赤川と元町配水場との標高差 30 メートルの水圧を利用、直径 30 センチのイギリス製鉄管を 17 キロ地中に埋めます。鉄管費用は総費用の半分近くの 9 万 3 千円に及び、翌年 4 月イギリスから鉄管を運んだ数千トンの船が入港、その大きさに住民は驚きます。明治 22 年 9 月に竣工完成、477 基の共用栓と多くの消火栓が設置されました。元町配水場の共用栓には、水桶を持った市民が行列を作り、冬になると凍結を防ぐため共用栓に藁縄を巻き、さらに小屋を建てたと記録されております。

見物客数万人の盛大な水道祭

9 月 20 日函館公園で疎水式（水道祭）が実施され、当時の新聞は「函館開闢以来の未曾有の盛事」と掲載されております。徹夜で準備し、公園の入口に大きなアーチが造られ、紋付袴・燕尾服で正装した来賓客は 500 人に及び、公園周辺は数万人の見物客で大騒ぎであったそうです。街中に飾り物や山車を設置、港内で花火が打ち上げられ、獅子舞が演じられるなど祝賀行事は 3 日間繰り広げられました。「飲料の乏しき町の函館に、あふるる音の赤川の水」との祝い歌の募集も行われ市民は大感激でした。しかし無知により一部住民間に「函館山から見れば赤川方面は元町より低いため、決して水は流れてこない」と囁かれておりました。事実予定時間になっても正面に設置されたイリス商会（鉄管購入）から寄贈の噴水塔から水が一向に湧き出ません。鉄管内の空気を押し出すため数分遅れで水が湧き出すと、大きな拍車が鳴り響き関係者は胸をなでおろしたそうです。この噴水塔は現在旭岡浄水場に保存されております。

函館水道は日本 2 番目？

開国に伴って来日した外国人たちは、近代水道の敷設を早くから要望します。明治政府は敷設費の調達に苦慮し、当座しのぎとして旧来の水道技術で対応します。ちなみに日本近代水道敷設は、横浜市明治 20 年、函館市 22 年、長崎市 24 年です。明治 12 年大火の不運で頓挫したと言え、計画が早かった函館が横浜より敷設が遅れたのは、函館を貿易扱い量で凌駕した横浜に外国商人が多数居留、政府に対する彼らの強い陳情の成果と言われております。函館は日本 2 番目、日本人設計では日本最初と多く知られております。しかし明治 11 年市来知（いちきち）（三笠市の前身）にあった空知集治監（刑務所）の囚人により造られた刑務所および付近住民 6000 人規模を対象とした水道敷設を日本 2 番目とする説もあります。

飛躍的に都市化が進んだ函館

水道という都市機能を備えた住民の生活利便は計り知れないものがありました。函館は急激に発展を続け、人口が急増、そのため早くも明治 29 年に元町配水場に高区配水池を増設します。その後も北洋業の活況により人口は増加を続け、毎日のように断水を繰り返し、消火用水も不足の状況に陥ります。漸く大正 6 年、コンクリートを節約した日本初のバットレス方式による笹流れダムを完成、水源も松倉川、汐泊川に広げ、その後 5 回に渡る拡張工事が実施されました。特筆すべきことに元町配水場は現在も函館山山麓の 2 万人に配水している日本最古の現役で、2001 年度に日本土木学会選奨土木遺産に選定されました。

イリス商会寄贈の噴水塔（レプリカ）
元町配水場内